

# 引札の配札圏からみた岩木山信仰

小山 隆秀<sup>1)</sup>

A study of the distribution of "hiki-huda"  
and how it resulted in worship of Mt.Iwaki by its surrounding population  
Takahide OYAMA

キーワード 岩木山信仰、百澤寺、引札、模擬岩木山、信仰圏、神仏分離、近代

## 1 はじめに

青森県津軽地方の霊山、岩木山に対する信仰は、仏教、神道、修験、民俗宗教などの諸要素が複合し、日本各地の山岳信仰のなかでも独特の形態を表出しているとされ、ときにその登拝習俗「お山参詣」（重要無形民俗文化財）に、伝統的な山岳信仰の「古態」を発見しようとする研究が続いてきた（宮田 1970、小館 1975）。その成果は、現代の一般向け観光パンフレット等での岩木山に対するイメージにも強く反映されているといえよう。

これに対して近年は、その形態が不変のものではなく、歴史のなかで動的な存在であったことを指摘する論考が続いた。例えば論者は、近世後期に岩木山信仰の中核を成した真言宗百澤寺や寺庵、社家らの具体的な活動を明らかにし、明治初期の神仏分離以降の、習俗の継承と変化を指摘したことがある（拙論 2003）。また岩木山信仰は、旧弘前藩領内のみに留まるという見解が長く存在したが、海運等によって天保年間（1830～1843）には、津軽海峡を越えた蝦夷地松前においても、津軽同様の岩木山神に関わる丹後日和の禁忌が、藩役人の宿改め等で、一定の効力を持って社会的に機能していたことが明らかとなり、昭和 30 年代には北海道室蘭市で数基の模擬岩木山が設立されていたこと（写真 1・2）など、近世から近年にかけて、旧弘前藩領外へも信仰の伝播が断続的にあったことが判明した（拙論 2009）。実際に近代のお山参詣には、北海道からも参加者があった（若佐谷 2003）。

その他にも、百澤寺に関わる伝説や旧記、近世史料等の分析から、岩木山信仰と藩権力との関係や、伝説「丹後日和」「さんせう太夫」や祭文「お岩木様一代記」の成立と流布について、再検討が行われている（2008 長谷川、2008 白石、2008・2010 入間田）。



写真 1 北海道岩木山神社  
(室蘭市東町、論者撮影)



写真 2 室蘭岩木山神社  
(室蘭市海岸町、論者撮影)

また、新聞や刊行物など、近代の文献史料の分析から、近代におけるお山参詣の変化について指摘がある。つまり、第二次世界大戦中の太平洋翼賛運動、昭和 59 年の文化財指定と観光イベント実施等の、近現代における様々な政治的・社会的施策を通じて、お山参詣における徒歩参詣スタイルが、習俗の担い手や地域の人々によって「伝統的形態」として画定されていったというものである（金子 2007）。

1) 青森県立郷土館学芸課・学芸主査（〒030-0802 青森市本町二丁目 8-14）

しかし実際にフィールドを歩けば、近代以降に画定されていったという「伝統的形態」のみが、すべての参詣者の行為を規定しているわけではなく、鱒ヶ沢地方の半裸にマワシをつける登拝習俗など、現在もなお、参詣者の各習俗は画一化されておらず、地域的差異が確認できるのである。

すなわち、昭和 50 年代に、地元の役場や観光協会が観光行事として整備した「レッツウォークお山参詣」といった、いわば「伝統的形態」を志向し、遵守する参詣スタイルと、それを意識しながらも自地域の習俗を継承してきた各ムラの参詣スタイルが併存し、棲み分け、使い分けがなされている現状があることに留意したい。

その現状の分析には、新聞史料や刊行物の資料としての性格も考慮しなくてはならない。近代から現代の新聞・マスコミ報道、刊行物類が、どこでお山参詣をとらえてきたかといえば、主に本山の岩木山神社周辺地域および駅などの結節点、交通の拠点における定点観測であることが多く、そこへ参集してくる前の各ムラからの準備、行程等にはほとんど目が向けられてこなかったといえよう。かつその視点は、参詣者自身の意識ではなく、参詣の人数や賑わい等を指標とする、神社や運営委員会、役所などの、統括する側の視点に近いことに注意する必要がある。

よって、社会的施策によって形成されていった「伝統的形態」が、いかに地域に受容され、実施されたかについては、実際に各集落や参詣者本人へのフィールドワーク調査で確認することが重要となってくると考える。

よって本論では、近世史料や近代の報告と、各集落への聞き取り調査で得られたデータの比較から、近代以降に社会的に認識された「伝統的形態」の要素とは異なる、各習俗の伝承と変化について報告し、分析を加えるものである。

## 2 近世の引札配札圏について

表1 百澤寺・十坊・社家による引札の配札分担表（18世紀末～19世紀中期）

No.	所属	担当名	担当地域	寺領(石)
①	百澤寺	方丈	弘前町中・青森町中・黒石町中・浦町組・横内組	400
②	寺庵(十坊)	寶積坊	(滅罪取扱之寺庵のため取扱無し)	16
③	寺庵(十坊)	西福坊	(滅罪取扱之寺庵のため取扱無し)	16
④	寺庵(十坊)	山本坊	猿賀組・大光寺組	16
⑤	寺庵(十坊)	福壽坊	(滅罪取扱之寺庵のため取扱無し)	16
⑥	寺庵(十坊)	南泉寺	浪岡組・常盤組	16
⑦	寺庵(十坊)	東林坊	赤田組・藤代組	16
⑧	寺庵(十坊)	圓林坊	田舎館組・大鰐組	16
⑨	寺庵(十坊)	法光坊	尾崎組・増館組	16
⑩	寺庵(十坊)	万福坊	柏木組・藤崎組	16
⑪	寺庵(十坊)	徳蔵坊	和徳組	16
⑫	社家	下居宮神主 安倍播磨	高杉組・赤石組・後潟組・藤代組・鱒ヶ沢町中・駒越組	10
⑬	社家	守山社司 山田左五兵衛	広田組・広須組・飯詰組・木作新田組・金木組・金木新田組・俵本新田組・藤代組・駒越組	3

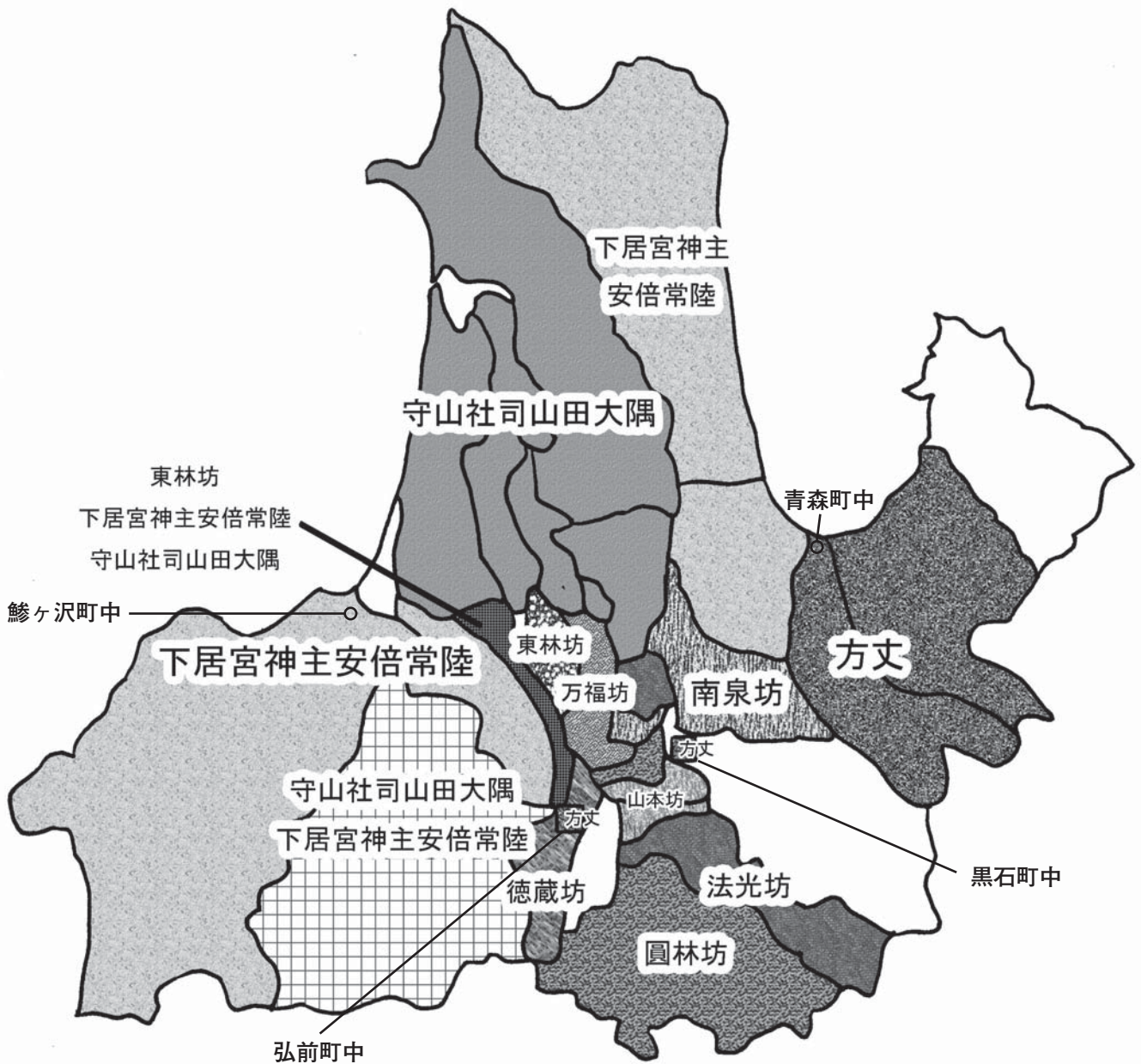


図1 百澤寺・十坊・社家による引札の配札分担地域（18世紀末～19世紀中期）

表1および図1は、近世の岩木山信仰を統括した真言宗百澤寺、およびその配下であった十の寺庵「十坊」と二つの社家が、寛政11年（1799）年以前から天保11年（1840）前後までに、「引札」の配札を行っていた地域を示したものである。これらは先行する拙論（小山2003）において、史料「岩木山三所大権現歳中行事」（百澤寺、19世紀）所収の「引札定帳之表」の記載をもとに作成し、解説を加えたものであるが、地図上で図示するまでにはいたらなかった。しかし、近年の近世史研究における絵図研究の進展（青森県史編さん近世部会2006a）によって、今回初めて具体的な地図として、提示することが可能となった。

なおその後の調査で、史料に記載されている山田大隅が、社家山田家五代目の伴令であるとともに、その生没年が、貞享4年(1687)から宝暦5年(1755)であるという子孫の家伝を確認した。よって、この引札配札圏の成立時期が、さらに18世紀前半まで遡る可能性も出てきた。

この「引札定帳之表」は、出羽三山信仰などのような御師や講組織の存在および活動の記録が未確認であるために「民衆による自発的な信仰と登拝習俗が展開した」とされてきた岩木山信仰研究において、宗教者の組織的布教活動の具体的な痕跡を示す、貴重な資料である。

改めて近世の「引札」の配札行為を解説したい。同史料によれば、これは、御国惣鎮守別当職である百澤寺が、弘前藩全領内へ直接に配布すべきものであるが、住持の考えによって、配下の寺庵や社家に代行させていた行為である。彼らの配札圏は、弘前藩領ほぼ全域に及んでいた。

具体的な各担当地域であるが、岩木山本山周辺は、下居宮神主安部常陸や守山社司山田大隅らの二つの社家が担当し、特に山麓の駒越組、藤代組は、二つの社家とともに、寺庵のひとつ東林坊が担当し、他地域に比べて割り当てが村単位まで細分化して実施していた。

そして、弘前町中、黒石町中、青森町中などの、人口が集住していた城下町および都市部は、「方丈」が担当した。彼は、寺格および石高ともに最高位の百澤寺のトップであった「院主」の次席であり、一年間の各儀礼を執行する上で、中心的な役割をする役職であった。また、藩都弘前周辺東部から平賀や大鱈などにかけた地域は、各儀礼で方丈の補佐を務めた「寺庵」(拙論2003、青森県史編さん近世部会2006b)が担当している。なおこの地域は中世期から開発が先行していた地域である。

そして藩領北部で、17世紀後半以降から、弘前藩による本格的な開発が始まった津軽平野の新田地帯は、二つの社家が担当した。社家は、百澤寺の各年中行事や儀礼、祈禱において方丈の補助的な役割を担っていたが、その石高は百澤寺や寺庵と比較してもかなり低かった(拙論2003、白石2008)。彼らが広大な藩領辺縁部を担当した理由は、その経済的格差をカバーするためであろうか。なお地図上の白い部分である堀越組や、弘前藩から分家した黒石藩領の黒石組、平内組は、担当が不明である。

この18世紀前半から19世紀にかけての引札配札圏は、明治3年(1870)から翌年にかけての百澤寺および十坊の廃寺によって、消滅したものと考えられる。

この図を、近代以降の岩木山信仰習俗の展開と比較してみると、百澤寺方丈および寺庵の担当地域が、近代以降のお山参詣において、初参り年齢が若く、本山への直接登拝が主で、模擬岩木山の設定が少ない信仰圏と重なっていることがわかる。かつ、社家の担当地域は、半裸にマワシを締めて石を担いで登拝を行う鱒ヶ沢地方や、岩木山の遥拝所や、本山登拝ができない人々が代参した模擬岩木山を設定する、といった特徴的な習俗を展開してきた地域と一致するのである(拙論1995)。

### 3 近代の岩木山信仰習俗について

以下は、19世紀まで社家の配札圏であった地域での聞き取り調査で、論者が直接に確認した、近代の岩木山信仰に関わる習俗である。

#### (事例1)

市浦村脇元集落西方の靄山(もややま)は、標高約152.4mの円錐形の山で、菅江真澄は、寛政8年(1796)6月23日条で「母夜山」と記している(菅江真澄1796)。天候がいい日には、山頂から岩木山本山が眺望できる。

毎年旧暦8月1日のツイタチャマの日には、登拝行事「脇元岩木山お山参詣」が行われる。1ヶ月前から準備が始まる。当初、祭りの運営は敬神会が中心になっていたが、第二次世界大戦前後に、徴兵やニシン漁の出稼ぎで春から秋にかけて、ムラの多くの男性が転出してしまうために、やがて敬神婦人会が中心となった。

近年は、ムラの産土社洗磯崎神社の氏子青年会による「お山参詣実行委員会」が中心となって、自由参加の祭りを行っている。氏子青年会は30歳から50歳代の脇元集落在住の人で構成され、実行委員会会長は、集落に長く住んできた人のなかから選出されている。

祭りは、ツイタチャマの前日「前夜祭」から始まる。当日は靄山裾野の小学校の隣にステージを設けて、出店で賑わう。洗磯崎神社宮司によって、靄山に向かって祈禱が行われた後、カラオケ大会や踊りで酒盛りが始まる。

昔から前夜祭には出店があったが、年々余興も盛大になり、参加者も増えており、近隣の中里、小泊、金木、車力、薄市、相内からも参加者がある。1980年代には、旧中里町高根や青森市清水からも参拝者があった。1992年からは津軽神楽の奉納も行われるようになった。

翌日旧8月1日朝8時ころから、隣村の磯松集落から脇元集落へ向けて小馬踊りの列が進み、全ての登拝者が洗磯崎神社で祈禱する。午前9時過ぎから午後3時頃まで、各集落ごとに10~20人単位の団体を組んで、御幣を持ってサイギサイギと唱えながら、集落内を練り歩いた後、靄山麓のステージ前へ集まり、再び駒踊りを奉納する。

その後、みんなで靄山参道を登っていく。約 300 人が登拝を行うこともある。山頂で御来光を拝むため、夜明けの時刻に登拝する人もいたという。かつて初参りの人は、御幣の頭に赤い布を付け、登拝装束は、岩木山本山同様、白装束であったが、現在は白い上着にズボンや平服姿が多くなった。集落から延びる参道には、無数の鳥居が連なっており、それをくぐった後、電光形に登っていく。中腹には 40 cm くらいの小さな女人結界石「姥石」があり、その先には大きな岩がある。かつて、その窪みに持参した水を注ぎ、御幣の切れ端を丸めて浮かばせて、その沈み具合で来年の豊凶を占う習俗もあったという。

麓から徒歩 30 分ほどで山頂に達する。山頂には、鳥居が一基、手洗水石一基と、広さ六畳ほどの「脇元岩木山神社」の社が建つ。この社には、前夜祭の夜から洗磯崎社の神主 3 名と、脇元集落の実行委員や氏子等の 5, 6 名が泊まる。社の修理は、旧小泊村、旧中里町の登拝実行委員会の奉賀や、脇元・磯松集落による一年に一度の定例寄附によって行われている。

山頂のお堂内には、大小 2 体の石像が祀られている。高さ 40 cm ほどの大きい石にはいわれがある。明治期に洗磯崎神社近くに住んでいた網元 I 家が、石倉を造らせていたときに、石工が削った石が偶然に岩木山の形になったため、靄山北西にそびえる御不動山に祀った。すると夢枕に神が立ったり、ゴミソの託宣もあって、岩木山神である靄山へ移されたものだという。この石は墓石形で、前面には杖と持った衣冠束帯姿の男神像と「岩木山大神」の文字が彫られている。もう片方の約 20 cm ほどの石は、個人による奉納物といい、由来は不明である。山頂で、持参した紅白の餅、野菜、草花を供えてから下山し、洗磯崎神社へ報告する。

明治期までの靄山は女人禁制であり、女性は不浄とされて中腹の姥石までしか登れなかった。当時は男性であっても、産土社を宿として一週間籠もり、注連縄を張って水垢離をとってから、御幣、幟を準備して登拝していたという。

かつての靄山は、日本海沿岸や北海道の漁業関係者に広く知られた、旧網元の S 家の山であった。山頂の社地は、現在も S 家のもので、脇元集落が借りており、廻り番で管理している。

また、隣村の磯松集落の N 家では、靄山の神を分祀しており、N 家が男女 2, 30 人の団体を率いて登拝をしている。紫色の半纏に黒帯をしめ、実行委員が大きな御幣を担ぎ、早朝に駒踊りの列を作って、磯松集落の公民館を出発し、脇元集落を経て、サイギサイギを唱えながら、靄山へ登拝する。

脇元・磯松集落では、靄山が姉で岩木山が妹であるといい、家で不幸があれば靄山へは三年間登らない。脇元では 60 年ほど前までは、元日のお宮参りの後も、紅白の二つ重ねのお供えと三合の御神酒を持って、靄山へ登った。(中泊町市浦村脇元「靄山」)

#### (事例 2)

鱒ヶ沢町米町小夜集落にある標高 47m の日和山は、かつて旧暦 8 月 1 日に、岩木山のツイタチヤマをカケることができなかった、子供や大人が参詣するための岩木山遙拝所であった。

伝説によれば昔、阿倍野比羅夫がここで日和を眺めてから蝦夷地に渡ったという。また、安政 3 年 (1856) 頃の絵図にも描かれており、当時は山頂に船用の永代常夜燈が設置されていたという。また近年まで漁師たちが山アテに使っていた。

山頂部には、東方の岩木山本山へ向かって、幅約 2m、高さ約 90 cm の三角形の石塔が建ち、裏面には「安政五年 二丁目米町 竹田市太郎 工藤直右五郎 安田衛 佐々木園治 菊谷要賀」の銘がある。彼らは安政五年 (1858) 当時の米町の船頭達であるという。この石塔は、米町一丁目廻船問屋 T 家の玄関口あたりの海から揚がったといわれ、ちょうど形が岩木山に似ていたために祭祀したという。

かつての日和山は、集落の共有地であり、昭和中期頃まで旧暦 8 月 1 日には、岩木山神を祀る行事を行っていた。当時は祭礼の数日前から、近隣の Y 家の古老が、米町一丁目から漁師町、舟町へ、20~50 銭の寄附を集めて回った。

祭当日になると、石塔が揚がった場所の竹屋に「ツイタチだ」と教えに行く。すると T 家は御神酒を一升、浜町の胸肩神社へ上げたという。お参りは主に、浜町、漁師町の人が総勢 20 名くらい、めいめい個人で登拝して午前中には終了した。登拝する人は家毎に、小瓶に入れた御神酒と焼き魚、酔の物、弁天様の好物である干し魚等を供物に持っていく。登拝は岩木山本山と同様に、初参りは白装束を着て、胸肩神社で切ってもらった銀紙の御幣を一本持つ。男の子が生まれると男性が背負っていった。女性は年寄りだけが登ることができた。

山頂では東方の岩木山本山を拝み、みんなで石塔の前で飲食したという。当時、岩木山に対する漁師の信仰は並々ならぬものであったという。山頂には、西方に向かって二基の鳥居がある。また、昭和に入ってから 20~50 銭ずつの寄附で立てたという、2, 3 間四方で飲食ができるくらいの広さの小屋が建っていた。それ以前の山頂は、建物が無い野原で、祭日には石塔の前でゴザを敷いて飲食していた。小屋のなかには御神体である鏡と、胸肩神社の神主が分祀してきた稲荷大明神や、金属製の御幣、ロウソク立て、賽銭箱、太鼓、参詣者が奉納した山の形

をした小さい石などが納められていた。小屋は 1980 年代末の暴風雨で倒壊している。

これらの祭礼道具と小屋の鍵は代々、隣町の魚釣町に住む H 家で管理してきたが、その理由は不明である。H 家向かいの I 家も代々、日和山の祭礼の世話役であった。正月は雪のために日和山へ行けないので、H 家の前に仮の祭壇を設けて拜んだ。

第二次世界大戦前までの日和山は、弁天様を祀る浜町の胸肩神社が祭祀をしたが、戦後は関与しなくなり、参詣者も減った。昭和 40 年頃までは、日和山へ草刈りや供えものをする人が僅かにいたが、石塔周辺部は個人の畑となり、近年は、H 家だけがときおり、石塔に花と供物を供えに行くだけである。そのためか H 家の S 女史が病床にあったとき、夢枕に白い服の日和山の神が出現し、小夜氏の腹の上に御幣を於いていったことがあるという。

(西津軽郡鰺ヶ沢町米町小夜「日和山」)

### (事例 3)

外ヶ浜町蟹田字外黒山集落の南方に、集落全体を見渡せる標高 91,3m の前山(まへやま)と呼ばれる山があり、イワキサン(岩木山)とも呼ばれた。集落内では最も高く、三角点が置かれている。麓の産土社外黒山稲荷神社から登拝道が延び、山頂には鳥居と祠があって、三体の石と木箱に入った「お岩木様」の木像を祀っている。

この木像と同じものを、旧蟹田町内の上小国、中小国、下小国などの集落でも、背後の山々でも祀っており、外黒山では「岩木山本山山頂の神像へ似せて造った」という伝承がある。前山は岩木山本山に似た山容であり、少なくとも三代以上前から岩木山神が鎮座していたという。

普段は誰でも登っていい山だが、山カゲの時期には女人禁制となったという。外黒山では、明治・大正期に「何年か一度の割合で(岩木山本山へ)山カゲしよう」という話が持ち上がり、学校を卒業する 15, 6 歳になった男子は必ず岩木山本山へ初参りをしていたという。



写真3 模擬岩木山「前山」  
(旧蟹田町外黒山、論者撮影)

当時は参詣の用意が、旧暦 7 月 20 日から始まった。新しいメリヤスの白いシャツを買ってもらい、一日 5 回の水垢離をとり、神社に籠って一週間、女人禁制の精進生活をした。宮参りと称して、近隣集落の各産土社を回って振る舞い酒をもらう。旧暦 7 月 30 日か旧暦 8 月 1 日のツイタチヤマの日に、ちょうど帰村できるような日程でムラを出発する。徒歩で油川から青森市新城駅まで行って、汽車に乗る方法が最も経済的だったという。

本山へ持って行く餅は、外黒山のイワキサンへ供える餅よりも小型で、背中に背負うために草で編んだ先祖伝来の道具もあったという。また御幣も本山の山カゲでは、長さが 1m50 cm ほどの片手で持てる小さな御幣を使い、蟹田八幡宮で作ってもらった。歩いているときに疲れて御幣を持つ手が下がってくると、年長者に叱られたものだという。木のカンナくずで作った御幣は、雨に濡れると重くなったが、第二次世界大戦後には、紅白のビニールテープ製となって軽くなった。

本山への山カゲでは、岩木山神社がある百沢に一泊してから登拝し、帰途は、青森市で一泊してから帰ってきた。帰村した旧暦 8 月 1 日は、外黒山イワキサンのツイタチヤマの日であり、本山の山カゲが無事に終わった御礼として、三方に二つ重ねの餅を載せて供えるために登ったという。

当時の男は、必ず岩木山本山と前山の両方に登拝せねばならず、片方だけの登拝は認められなかった。お産や不幸があった家は一年間は登ることができなかった。また不作で「世の中が悪い」年には、前山へ登らない。

また岩木山の神は、旧暦 6 月 15 日の命日に里から山へ登り、旧暦 8 月 15 日の命日は、山から里へ下りてくるものだといひ、それぞれの日には「お宮の係」が、お岩木様の像を山頂の祠と麓の稲荷神社の間を運搬する。よって、お岩木様の木像は、冬季期間は産土社内に置かれていた（旧蟹田町外黒山「イワキサシ」）。

事例 1 および 2 のような、岩木山信仰に関わる石塔類や小祠の建立は、ほかに、天保年間（1829～46）に岩木山神を祭祀したという今別町大泊の烽火（ノロシ）山の岩木山神社、天保 18 年（1844）および慶応 3 年（1867）建立された三神像と「岩木山」の文字が彫られた石塔二基がある中泊町小泊字折戸の岩木山大権現堂や、小泊字下前にある熊野宮内の「お岩木山」の石塔がある（小泊村史編纂委員会 1998）。

いずれも建立年代は 19 世紀以降が多い。事例 1 の靄山も、ニシン漁の網元家が管理を行っていたことや、山頂の岩木山像が衣冠束帯姿の男神像であるとともに「明治に奉納された」という伝承から、近代以降に整備された可能性がある。他にも論者の聞き取り調査によれば、今別町大川平の岩木山神社は、幕末に庄屋に夢告した後、明治中期に再興したという伝承があり、平舘村磯山の岩木山神社も、近代に鉱山業者が建立したという。これらの地域は、近世において社家の配札圏内であった。

一方、事例 3 の旧蟹田町では、七ヶ村と呼ばれる主要な各集落が、背後の里山をイワキサシと呼んで模擬岩木山の機能を付してきた特徴的な地方である。これらの模擬岩木山の設置時期については明らかではないが、昭和 41、2 年頃の同町小国での調査では「（模擬岩木山は）明治期 36、7 年（1903、4）染病がはやったため、お山参詣ができなくなったので、かりに岩木山をつくった」という伝承が確認されている（宮田 1970）。

そして旧蟹田町の各イワキサシの神像「お岩木様」は、いずれも彩色した衣冠束帯姿の、高さ約 30 センチほどの男神木像として、画一化されており、事例 1 の石塔に彫られた男神像とも類似している（写真 4）。事例 3 の南沢では「岩木山本山の神像を模した」という伝承がある。

これらの像が類似する岩木山本山の男神像「顕国魂神」（写真 5）は、百澤寺廃寺後、東京神田で铸造され、明治 4 年（1971）7 月に津軽へ到着し、藩の大参事らが参拝するなか、神主の祭祀によって、28 日までに岩木山山頂へ鎮座させられたものである（坂本 1990）。そして幕末当時、百澤寺が祭祀していた聖観音像は、大鰯町の専称院へ移されたという（品川 1968）。そして明治 6 年（1873）、岩木山神社は國幣小社となった。

なお、昭和 30 年代に、北海道室蘭市各地で、次々と設置された三つの模擬岩木山の神像（写真 6）も「（岩木山）本山の神像を模して製作した」という伝承がある。また弘前市内の個人宅の神棚に祀られている岩木山神像（写真 7）も、ほぼ同じ外形である。



写真 4 旧蟹田町下小国イワキサシ（丸山）山頂の「お岩木様」像（論者撮影）



写真 5 岩木山（本山）山頂奥宮の御神像「顕国魂神」（論者撮影）



写真6 岩木山神像  
(北海道室蘭市本輪西八幡宮、論者撮影)



写真7 家の神棚に祀られた岩木山神像  
(弘前市内個人)

また旧蟹田町各集落で共通するのは、一定期間、岩木山像を山頂と麓間で送迎する行為である。例えば、下小国集落のイワキサ<sup>まるやま</sup>ン（丸山）では、お岩木様の命日は、旧暦6月15日に神像を山頂へ上げる「山上げ」、旧暦8月1日に登拝する命日、旧暦8月15日に神像を麓へ降ろしてくる「山下げ」の三日あったといい、産土社の係3名が中心となって運営した。同じく山本集落のイワキサ<sup>まるやま</sup>ンでは、送迎する儀礼のときに、産土社の三名の総代が御神酒を携え、うち一人が高さ30cmほどの木像「お岩木様」を、白いサラシやタオルで包んで前向きに抱いて運搬したという。

この行事は、岩木山本山において、昭和31年以降から始まった、岩木山神社による毎年旧暦7月14日前後の儀礼「御神像奉搬奉告祭」に似ている。この行事は、かつて岩木山本山山頂に常駐していた御神像が、昭和31年10月20日から28日頃に盗まれて、沢に捨てられた事件が発生したために、その防止策として、冬期間は山麓の岩木山神社奥宮に安置し、お山参詣前後の夏季期間だけ、山頂へ奉納するようになったものである。現在は毎年旧暦7月14日頃になると「奥宮御神像奉搬管」と墨書された木箱に、写真5の御神像を入れて神官が背負い、胸の前に両手を組んで地面を触らないようにして、山麓の岩木山神社から山頂奥宮へと歩いて運ぶ。このとき有志「岩木山日乃出会」が補助する（写真8）。奥宮に御神像を安置した後、「御神像奉搬の儀」を行い、祝詞を捧げ、一同で祈禱する（写真9）（青森県史編さんグループ2008）。

以前から、各地の模擬岩木山の設置年代が、近代以降である可能性が指摘されていた（2003 金子）。以上の事例から、明治期から昭和30年代まで、模擬岩木山の設置だけではなく、岩木山神として男神像の複製と奉納、および神像送迎儀礼等の諸習俗までが、津軽各地から北海道南部まで、伝播していったことが確認できる。

#### 4 まとめにかえて

以上、青森県津軽地方の岩木山信仰における、石塔建立、模擬岩木山の設置、男神像奉納等の習俗が、主に幕末から近代にかけて、主に近世に百澤寺に供奉していた二つの社家、下居宮神主安倍常陸家、守山社司山田大隅家による、引札の配札圏地域において展開していたことが判明した。

二つの社家の影響力は、神仏分離後の近代以降も、何らかの形で継続し、地域に影響を与えた可能性がある。なぜならば、社家の担当地域であった事例1の北津軽郡は、近代以降も岩木山信仰が盛んな地域であったと考えられ、前述した模擬岩木山の設置のみならず、明治初期、弘前の絵師工藤仙来（1863～1944）が、岩木山本山へ登拝に向かう中里村中一行の姿を、巨大な襖絵に描いた絵画資料（写真10）が、岩木山本山山麓にあたる旧岩木町の旧家で発見されている。

また、二つの社家が分割して担当した藤代組、駒越組の地域は、現在の岩木山神社周辺部にあたるが、現代でも神社崇敬会等の熱心な信者が多く、盛んにお山参詣習俗を継続している目屋等の地域を含む（長谷川2006）。

それでは、阿部家、山田家の二つの社家は百澤寺廃寺後、どのような近代以降を迎えたのであろうか。

記録によれば、百澤寺住職多田家や各寺庵は廃寺となるが、応徳年間（1084～86）から岩木山の神官を世襲してきたと伝える安倍家は、慶応4年（1868）（または明治3年（1870）とも）の十四代貞世死去後、神官廃止となったという。また、天正期から岩木山の祝部を歴任してきたと伝える山田左五兵衛家は、明治期の神仏分離以降も神官を相続したという（内藤官八郎 1892）。





写真8 御神像を山麓の岩木山神社から  
山頂奥宮へ運ぶ  
(2008年8月27日論者撮影)



写真9 岩木山山頂奥宮での御神像奉遷の儀  
(2006年9月20日論者撮影)

その社家山田大隅 15 代目の子孫は、現在も津軽地方で神社の宮司を務めており、次のような家伝がある。

(事例 4)「江戸時代の岩木山の社家として、山田家と安倍家があった。山田家は、永禄 3 年 (1560) 山田左衛門太郎伴定の代に岩木山へ移住し、慶長 14 年 (1609) 以降の二代目左五兵衛伴清か、三代目の左之助伴盛の時代に、弘前藩に召し抱えられたといい、津軽地方へ移住してから 11 代目山田稻城 (1846～1893) までの系図が残る。明治以前まで、ベツウである山田家は、百澤寺の多田家とともに、鱒ヶ沢方面などへ、お札を配りに歩いていたという。」

この伝承は、前述した引札の配札を記した史料の内容とほぼ一致する。つまり社家は、近代以降も、岩木山信仰の展開に関して、なんらかの影響力を継続した可能性があり、彼らの近代以降の動向を分析する必要がある。

以上、近代以降の新聞記事や刊行物が、本山中核部の動向に注目し、記録していた一方で、近世の下居宮神主安倍常陸、守山社山田大隅らの社家が配札を担当した地域では、近代特有の習俗が形成され、変容が発生していたことがわかった。しかしそれは、近在の新聞や諸々の刊行物等には、記録される機会がほとんど無かったのである。



写真10 岩木山本山の岩木山神社へ参詣する中里村中の一  
(明治10年代、工藤仙来画「お山参詣図襖(部分)」より、弘前市教育委員会蔵、論者撮影)

## 引用文献

- 青森県環境生活部県民生活文化課県史編さんグループ編 2008 『青森県史叢書 平成十九年度 岩木川流域の民俗』青森県、P146
- 青森県史編さん近世部会編 2006a 「津軽領組分図」(同編『青森県史 資料編 近世3 津軽2 後期津軽領』付録、青森県)
- 同上 2006b 同編『同上』、p507～509
- 入間田宣夫 2008 「岩木山と花若殿・安寿姫の物語」(『真澄学』第四号、東北芸術工科大学東北文化研究センター)
- 入間田宣夫 2010 「岩木山と花若殿・安寿姫の物語(続)」(『真澄学』第五号、東北芸術工科大学東北文化研究センター)
- 金子直樹 2003 「岩木山の宗教景観について—模擬岩木山・末社・石碑を中心に—」(関西学院大学人文学会編『人文論究』第52巻第4号、関西学院大学)、p82
- 金子直樹 2007 「近現代における岩木山参詣習俗の変容—徒歩参詣の伝統化—」(『日本民俗学』第249号、日本民俗学会)
- 小舘衷三 1975 『青森県の文化シリーズ2 岩木山信仰』北方新社
- 小泊村史編纂委員会 1998 『小泊村史』下巻、小泊村、p453～454
- 坂本寿夫 1990 『津軽近世史料5 津軽近世史料刊行会編集 弘前藩記事 三』北方新社、p275～276
- 品川弥千江 1968 『岩木山』東奥日報社、p82～83
- 白石睦美 2008 「岩木山信仰と領主権力—硫黄山出火を中心に—」(弘前大学大学院地域社会研究科編『弘前大学大学院地域社会研究科年報』第5号、弘前大学)
- 菅江真澄 1796(寛政8年)「外浜奇勝」(内田武志・宮本常一編1987『菅江真澄全集』第3巻、未来社、p139)
- 内藤官八郎 1892(明治25年)「弘藩明治一統誌神社縁起録」「岩木山」の項(青森県立図書館編1982『青森県立図書館郷土双書第二十一集 弘藩明治一統誌 第二巻 神社縁起録 全 内藤官八郎著』同館)
- 長谷川成一 2008 「近世津軽領の「天気不正」風説に関する試論」(弘前大学大学院地域社会研究科編『同年報』5号)
- 長谷川方子 2006 「西目屋村お山参詣(二〇〇四年度)」(『青森県の民俗』第6号、青森県民俗の会)
- 百澤寺 1848(嘉永元年)カ 「岩木山三所大権現歳中行事」岩木山神社蔵
- 宮田登 1970 「岩木山信仰—その信仰圏をめぐって—」(和歌森太郎編『津軽の民俗』吉川弘文館)、p293
- 若佐谷五郎兵衛 2003 「青森市細越のお山参詣」(『青森県の民俗』第3号、青森県民俗の会)
- 拙論 1995 「模擬岩木山習俗からみた岩木山信仰—信仰圏の設定をめぐって—」(『日本民俗学』第203号、日本民俗学会)
- 拙論 2003 「岩木山信仰形成における宗教者の役割と習俗の変化」(青森県環境生活部・スポーツ振興課県史編さんグループ編『青森県史研究』第8号、青森県)
- 拙論 2009 「北海道の岩木山」(『青森県の民俗』第9号、青森県民俗の会)、p78

(謝辞) 調査では、岩木山神社、森山豊氏、山田伴國氏、青森県史編さんグループ、弘前市教育委員会、弘前市岩木総合支所総務課岩木町史編さん担当にご協力をいただいた。また本稿の「略地図」作成では斉藤健之氏にご助力いただいた。各位に深く感謝申し上げます。